

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 24

関西大学考古学等資料室彙報

平成3年11月30日発行



縄文土器（伝青森県亀ヶ岡遺跡・出土）

目 次

故末永雅雄先生と考古学等資料室……………	2
中国海城市の「析木城石棚」について……………	4
蘇州の全晋会館……………	6
オリンピック博物館とクーベルタン……………	8
博物館実習における「展示実習」雑感……………	10
平成3年度調査報告「東北地方」の遺跡及び博物館施設……………	12

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3の35

Tel 06-388-1121（内線3341）

故末永雅雄先生と考古学等資料室

名誉教授末永雅雄先生は去る5月7日午後3時30分、心不全のため大阪狭山市の御自宅で御逝去になりました。茲に謹んで哀悼の意を表します。

先生は昭和25年4月、関西大学において考古学の講筵を開かれ、昭和27年4月に教授に御就任、考古学研究室を開設されました。

爾来、昭和43年3月、定年退職、45年3月まで客員教授をつとめられ、同年4月に名誉教授の称号が贈られました。

約20年間に及ぶ御在職中、本山コレクションの関西大学への移管、関西学院大学との共同による摂津加茂遺跡の発掘調査、島根大学との隠岐学術総合調査をはじめ、岩橋千塚、新沢千塚、高松塚など組織的な発掘調査を指導されてきました。

とりわけ、関西大学に考古学研究室を開設され、本山コレクションを移管、現在の考古学資料室の基礎を確立して下さいました。その後、発掘資料、寄贈資料、購入資料を加えて簡文館二階に展示室を設け、研究、教育に利用させていただくことが出来るようになりました。

この本山コレクションの移管の経緯につきましては関西大学教育後援会から刊行（昭和61年11月4日）されました『常歩無限——関西大学考古学廿年の歩み——』のなかに「本山考古学資料の収受」の項があり、そこに詳しく記述されています。

それによりますと、昭和5年か6年頃、先生の恩師浜田耕作先生から本山彦一（松陰）氏が収集されている考古学資料の整理を命じられそれに従事されました。このことについて「本山コレクションは毎日新聞社の広い組織網を利用して収集されたものであって、主力は日本考古学だが世界各地にわたる考古学資料とともに民俗学資料もかなりたくさんある」と内容を述べられ「私も本山考古室の資料整理をさせて頂いたことは非常に勉強になった。」と書かれています。この資料調査の成果は『本山考古室目録』

（昭和8年11月30日、故本山彦一氏の一周忌に刊行）ついで『本山考古室目録』（昭和9年12月25日付）『本山考古室要録』（昭和10年2月5日



ありし日の末永雅雄先生

付）で刊行されました。

ところが第2次世界大戦の戦火が拡がり、本山コレクションの展示してあった農業博物館の屋上に高射砲が据えられ、駐在する兵隊が展示ケースを隅に寄せ、展示室を事務室に使用するようになったので重要資料を地下の倉庫に移されました。

戦後、天理参考館から本山家に対してこの資料の譲渡の申し出がありましたが、結局、先生の判断で関西大学に移されることになりました。しかし、関西大学にもいろいろな事情があったらしいのです。このときのことを「私はこのときの発言でまかり間違えば関大を去る決心をしていた」とも記されています。

それはともかく本山考古資料は関西大学に移管されましたが、「このことの関係者の中、前に書いた事務関係者（用度課長片岡権治郎氏、経理課長松本長左衛門氏）の諸氏は特に大学資料搬入の功績者として記憶して置いて頂きたい」と記されています。また重要美術品の銅鉾をはじめ「その他若干の散佚資料があり、私が見つけて買収することのできたものもあるが敗戦の混乱と本山氏の死亡で私の編集した『本山考古室要録』から抜けたものも少なくないと思うが、将来どこかでその存在を見つけた場合には大学が集めて置いて欲しい」と託されています。

また、「文科系の学問の道は……長い間の積み重ねから成果が得られるのである。そうした意味を社会の状態から考えると、考古学は特に学会の労働者のような半面がある。それだけ他の研究者よりも長い年月の下積——学界の——生活がつづくのである。遺跡調査で新聞が大きく取上げて世間に名前が知られてもそれはその時限りのものであって、本人はそれよりあと鋭々して研究を積み重ねばほんとうの学問は成り立たない。その点で私も学界の一労働者である。」と諭されています。そして、最後に「諸君に期待する」という項を設け、「私が関西大学文学部考古学研究室で、学生諸君と過ごした二十年を回顧した。この年月の歴史は私にとって短かった。着任当時いろいろな考古学上の企画をもったが自分の目で確め得たことは僅かしかなかった。」とし、「私の希望は考古学という一科目だけを標準にしているのではなく、わが大学の学生——これから入学し、育ってゆく若人——に何か教養ともなり、学問への志向を助け、あるいは社会人として巣立つ本学々生に、関大創立百年の祝福と次代の百年に対して何か考えたいと思っている。」と述べられ、「将来の関西大学の考古学が堅実に発展されることを希望する」と結ばれています。

先生が前述の本山考古資料を関西大学に移管され、旧図書館3階の小さな部屋に陳列されて

いました。同書の「霜雪の時期」のなかでそのいきさつを次のように書かれています。「本学の考古学の建設時代のあるとき、大学設置委員会の人たちが視察に来たことがあった。その通知をうけて私は僅かばかりの研究資料を展示するために研究室の向い側の一室を考古学資料室としてそこにささやかなケースを三つ、難波の東にある家具屋を歩いて品定めして大学へ送らせ一応資料室の準備をした。そこに収めたのは若干の土器や古瓦破片と古文書であり、かつて毎週整理をした膨大な資料を有する京大考古学教室を思い起してさすがに淋しさを感じたが、建設時代はこうであると自分に云い聞かせた。視察に来られた委員諸氏は一瞥をただけですぐ出られたのはまさに委員たちの識見を示すものであった。……このときの資料室は今日の考古学等資料室の出発点となる二葉であったことを関係者たちは記憶に留めて置いて欲しい」と記載されています。

敢て先生の追悼に著書『常歩無限』の中に書きのこされた文章を引用したのは考古学研究室の創始者である末永先生の今後への期待とこれが遺訓となったからであります。

考古学資料は学園紛争の折、大阪市立博物館に一時的に疎開しました。そのあと大学院学舎の新築にあたりその4階に展示室を設けていただき、新図書建設にともなって、簡文館（旧図書館）に移り一部を展示室にすることとなり、現在国内外の研究者、来訪者、そして月1回学内に対して公開しています。また、博物館に関する研究成果を発表するため『関西大学考古学資料室紀要』や『阡陵』なども刊行してきました。しかし先生から託された期待を十分に果していないことも反省しています。

先生の御逝去の訃報に接し、第一陳列室に遺影を掲げ先生の冥福を祈りました。

（考古学等資料室管理運営委員長 網干善教）



考古学資料室に先生の遺影を掲げ御冥福を祈る

中国海城市の「析木城石棚」について

網 干 善 教

考古学は物的な実証の学である故に考古学徒はできるだけ多くの遺跡や遺物を実見したいと考え、行動する。筆者も考古学に関心をもつようになった頃から支石墓という言葉も知ったし、ドルメン (Dolmen) という呼称も知った。特に四周に板石の支石を樹てて囲み、撐石と称する巨石の蓋石 (天井石に相当) を載せて箱形の石室を形成する北方式 (卓子式) 支石墓 (朝鮮半島南部から日本にある支石墓は南方式) の雄大な状況を図版などで見てはいたが、身近にそのようなものが遺存していないこともあって実見することもなかった。

また、こうした遺構の所在する場所が中国東北地区や朝鮮民主主義人民共和国であり、外国人に対して未開放地区であったことなどから実際に見学する機会がなかった。ところが今回尼崎市と友好都市である鞍山市の人民政府、人民对外友好協会、外事办公室の招きにより徳山喜昭氏らと訪中、その際鞍山市、海城市の両人民政府の好意により、海城市文物保管所長兼、博物館長高樹成氏の案内を得て、海城市析木鎮姑

嫂石村に所在する「析木城石棚」 (支石墓) を実見することができた。

析木城石棚は海城市の東南約30 km のところにあり、昭和2年に鳥居龍蔵博士が現地調査、昭和21年 (民国35年) に発表された『中国石棚之研究』 (燕京学報31期) に紹介され、その後山本正・久原次氏の「南満州のドルメンとその方位」『歴史と地理28-2』 (昭和8年)、鳥居龍蔵博士『満蒙の探查』 (昭和3年) に簡単な紹介があり、三宅儀成氏の『満州考古学概説』 (昭和19年) の口絵、村田次郎博士の『満州の史跡』

(昭和19年) の挿図、中国東北地区から朝鮮半島にかけての支石墓の研究を大成された三上次男博士の『満鮮原始墓の研究』 (1961年) の口絵及び同書の「第一編、満鮮地方における支石墓の研究」の「支石墓集成表」に挙げられた「岫巖県姑嫂石第二号支石墓」がこれに相当する。

三上博士は集成表のなかでこの支石墓を次の如く説明されている。

〔立地条件と存立状況〕 No. 1 (第1号支石墓) の東方に続く丘陵の先端で、下に砂河



析木城石棚の現状 (1991.7.23)

を望む。ほぼ完全に残る。(鳥居龍蔵博士によると高70~80 mの丘陵上)

〔撐石の長×幅×厚〕 5.78×5.05×0.43 m
(山本正、久原市次氏) (20.4×19.5×1.1 尺、鳥居博士)

〔全高〕 2.63 m (山本正、久原市次氏) 8.3尺 (鳥居博士)

〔石室の間口×奥行×高及構造〕 高2.20 m
(7.15×6.30×8.05尺?、鳥居博士)

支石は□字形に残る。但し南面は下半部のみ残り、上半分は欠失す。室内には地表より40 cmの高さにて床石が1枚しいてある。一辺は磁北より39°西に偏す。

〔石質〕 花崗岩

〔副葬品〕 昭和2年の鳥居氏の調査の際、その下附近から石器・土器を発見

〔記事〕 鳥居龍蔵『中国石棚之研究』の記事に誤りあり。(「鳥居 p. 129に岫巖県姑嫂石第2号支石墓についての報告がある。しかし氏が姑嫂石第2号墓のことを記している事実と数字は、実は普蘭店小石棚の支石墓のことで、全然、姑嫂石第2号支石墓のことではない。読者は注意を要す。)

〔調査者、調査年月〕 山本正、久原市次 (昭和5年5月)

〔基本史料〕 村上秀一「最近発見せられたるドルメン」『史前学雑誌1-4』(昭和4年)
山本正、久原市次「南満州のドルメンと其の方位」『歴史と地理、28-2』(昭和6年)
久原市次「南満州のドルメンに関する一考

察」『満蒙地理歴史3』(昭和8年)

〔参考史料〕 村田次郎『満州の史蹟』(昭和19年)

鳥居龍蔵『満蒙の探査』(昭和3年)

さて、筆者等一行4名は平成3年7月23日現地を見学した。海城から岫岩(しゅうがん)鉄道(玉石採集の地方鉄道)の沿線平坦地から比高差約80 mほどの丘陵があり、車で約1 kmほどヘアピンカーブを登ると東西約20 m、南北約30 mほど平坦になっており、その中央に支石墓が遺存する。眺望は極めて良好である。説明標示には次のように記される。

省級文物保護単位

遼寧省人民委員会

1963年9月30日公布

鞍山市人民政府

両座、俗称姑嫂石、嫂石僅存北壁残段、姑石保存完好、用六块磨光、大石板支架而成、呈长方体、上有巨石石蓋、長六米、寬五点一米

該石棚属三千年前、青銅時代遺跡、是我国目前保存的時代最早的地上建築

(原文簡化漢字使用)

注意してみると岫石(蓋石)に牽引の際の縄の滑りどめのための凹溝がつくられている。説明によるとこの石材は、この地点より15 kmほどのところから運搬してきたと考えられるということであった。

なお、三上博士の「支石墓集成表」に記載されている第1号支石墓はこの丘陵の麓にあって大破していたとあるが、現地で聞込みをしたところ、近くの東牌楼鎮の小学校の近くに移したので現地にはないとのこと、さらに東牌楼鎮で追跡調査したがすでに所在は不明になっていた。



析木城石棚遺存立地遠望

蘇州の全晋会館

松 浦 章

I 16世紀末に江蘇省の蘇州を訪れたマテオ・リッチは同地の印象を次のように伝えている。

間もなく神父（リッチ）はスーチェオ（蘇州）市に到着した。この都市はチーナ（中国）でもその美しさ、富、食糧や商品の豊かさの点で屈指の名高い都市である。それゆえ、こういう諺があるほどだ。

「天上には美しい天の広間があり、地上には美しいスーチェオ（蘇州）とハンチェオ（杭州）がある。」ハンチェオはチェキアーノ（浙江）の省都で、古くはチーナ王国の王座の置かれた王都でもあった。スーチェオは、湖上に立つとまでは言えないにしても、風の向きに沿ってわずかに流れる川のなかに立っている。それはヴェネチアが海中に立っているのに似ている。

リッチの印象ではヨーロッパの商業都市ベニスと対比されるべき繁栄を誇っていた。リッチの訪れた時期の蘇州は明代の末期であったが、蘇州の繁栄は清代においても変わりなかった。乾隆二七年（1762）の「蘇州新修陝西会館記」には、「蘇州は東南の一大都市であり、商賈が輻輳し、百貨がずらりとならんでいる。」と評されたように、蘇州は清代においても商業の発達した都市であった。このため中国全土から多くの商人が参集してきた。その結果多数の商人会館が設立されたのであった。

II 商人会館の創建の古いものは明の万暦年間（1573～1620）のもので、蘇州府近郊の商人による〈三山会館〉、同時期に広東商人によって創建された〈嶺南会館〉が知られる。次いで明末の天啓五年（1625）に広東省恵陽の商人による〈東官会館〉が創建されている。

清代になると順治年間（1644～1661）には山東省の膠州・青州・登州の商人によって〈東齊会館〉が、康熙十六年（1677）に広東省の東莞商人により〈宝安会館〉が、同十七年（1678）には江西省南昌府の義寧州の商人によって〈岡州会館〉が、同十九年（1680）到北京順天府の

大興県の商人による〈大興会館〉が、同二三年（1684）頃には江西商人による〈江西会館〉が、同四七年（1708）に広東の潮州商人による〈潮州会館〉が北濠より閭門外に移築され、同五七年（1718）には福建省の汀州商人によって〈汀州会館〉が、同年に江淮の商人によって〈高宝会館〉が、同六十年（1721）には山西商人の〈全晋会館〉が、やはり同康熙年間に福建の漳州商人によって〈漳州会館〉も創建された。

次いで乾隆年間（1736～1795）の創建になるものは〈武林会館〉、〈宣州会館〉、〈陝西会館〉、〈金華会館〉、〈毗陵会館〉、〈徽州会館〉、〈錢江会館〉、〈仙翁会館〉等がある。

嘉慶年間（1796～1820）に創建されたのは〈東越会館〉、〈嘉応会館〉、同治年間（1862～1874）に創建されたのは〈吳興会館〉、〈安徽会館〉、〈湖南会館〉、清末の光緒年間（1875～1908）には〈江寧会館〉、〈両広会館〉、〈武安会館〉、〈八旗奉直会館〉、〈全浙会館〉等がある。

最近の調査では以上を含め40会館の存在が知られ、さらに同業者組合の組織に当る公所が157箇所存在していたことが確認されている。蘇州にこのように多くの会館、公所が存在していたのは蘇州が商業の中心地であったことによる。特に各会館の創建時期から見て明の万暦年間（1573～1620）が繁栄の創世期を現出し、清の康熙年間（1662～1722）より乾隆年間（1736～1795）にかけて繁栄の極地に達したと



写真① 全晋会館



写真② 全晋会馆正面

言えるであろう。

Ⅲ 蘇州における清代会館のうち当時の状況で保存されているのが〈全晋会館〉である。

〈全晋会館〉の創建は乾隆四二年（1777）の「建造全晋会館碑記」によれば、康熙六十年（1721）に遡るが、道光二二（1842）刊の顧禄の『桐橋倚棹録』巻六、会館の条に、「全晋会館在半塘橋、国朝乾隆三十年山西商建。有關帝殿、殿前有白石碑坊、俗呼白石会館。」とある。民国二二年（1932）の『吳縣志』巻三十、公署三、局所の項には、「全晋会館 在虎邱半塘橋。清乾隆三十年山西商人建、有關帝殿。」と記している。両書ともに虎邱の半塘橋に〈全晋会館〉があつたとする。乾隆元年（1736）『江南通志』巻二五、閩津、蘇州府に、「半塘橋、自閶門至虎邱半、有七里山塘。此橋適得其半、故名。」とあるように、半塘橋は大運河に絡る山塘河が蘇州府城より北西に延び虎邱に至る中間地点にあつた。そこに〈全晋会館〉もあつた。その後、清末に〈全晋会館〉は城内に移転したのである。

現存の〈全晋会館〉（写真①、②）は現在の地名呼称で言えば、旧蘇州城内の中央東部に位置し、旧城内のほぼ中央を南北に通じる人民路と平行に走る二筋東側の平江路に東より交差する中張家巷に南面している。現状の〈全晋会館〉は、1989年に蘇州人民政府によって立てられた「全晋会館重修記」碑によれば、1879年（光緒五年）に蘇州に來訪する山西商人によって現存同様規模の建造物が建てられたが、1976年に消失し、120万円の費用を要して1982年1月に再建されたのである。同会館はまた蘇州戯曲博物館（写真③）として存続している。



写真③ 蘇州戯曲博物館

Ⅳ 蘇州に中国各地の商人が参集してきたことは、会館の存在のみならず文献資料にも散見する。康熙『蘇州府志』巻二一、風俗に、「遠方の賈人、資を挟みもって厚利をむさぼる。」と記されているように、全国各地から厚利を求め多くの商人が集まって来たのであつた。また雍正元年（1723）五月二四日付けの何天培の奏摺にも、「蘇州の南濠一帶は客商が聚集すること尤も多し、歴來かくのごとし。」とも記していることから明らかであろう。

とりわけ蘇州府城内外でも商業市場として繁忙の地は、康熙『蘇州府志』巻二一、風俗に記す次の地である。「楓橋の米・豆、南濠の魚・塩・薬材、東西匯の木簾のごときは雲委山積す。」とあるように、蘇州府城西側にある寒山寺に近い楓橋で米や豆の穀物類の取り引きが、蘇州府城西側に隣接する南濠一帯では魚、塩、薬剤の取り引きが行われ、府城を取り巻く東匯、西匯の水路には各地からの舟船が雲のように連なり、水運によって各地の物資が搬入され、これらの地では大量の商品が見られたのであつた。

上述のように明代後期から清代にかけての蘇州は全国各地からの商人が参集する一大市場を形成し、同時に彼等の宿泊、取引等の場としての商人会館が全国規模で見られたのである。

〈参考文献〉・川名公平訳、矢沢利彦注、平川祐弘解説『マッテオ・リッチ 中国キリスト教布教史』（岩波書店、1982年11月）393～394頁。・『江蘇省明清以来碑刻資料選集』（影印本、大安、1967年8月）。・『明清蘇州工商碑刻集』（江蘇人民出版社、1981年2月）。・唐文權「蘇州工商各業公所的興廢」（『歴史研究』1986年第3期）。

オリンピック博物館とクーベルタン

伴 義 孝

「スポーツで世界平和の実現を！」とは絵空事だろうか。1894年6月23日、国際オリンピック委員会（以下、「IOC」という。）が、ともかくこの理念のもとに、フランス人のピエール・ド・クーベルタン男爵（1863-1937）によって創設された（写真1）。

IOCは、現在ではスイスのローザンヌに本拠地をもち、つぎの「オリンピック運動の4大理念」を標語にして活動が続けている。

スポーツの本質である身体的、精神的資質の向上を促進する。

スポーツ教育をととして若人の相互理解と友情を深めて、もって、平和な世界を建設する。

オリンピック運動を世界に広め、もって、国際親善につとめる。

4年毎に開催するオリンピック大会に、世界のスポーツ人を集める。

「オリンピック博物館」は、IOCがオリンピック理念のメッカとして開設したものだが、美しいローザンヌの町並みに調和して気取らぬ風情で、観光客や専門家をとわず、世界各地からの来館者を待っている（写真2）。所在地は、ローザンヌ駅から、ゆっくり歩いて5分、駅前のRuchonnet大通りのハウス番号「18」。館内は、1階が「博物館」で、2階が「図書館」と「研究室」、3階が「資料サービス室」と「会議室」になっている。

建物はいたってこじんまりしていて、海をこえて日本からわざわざやってきたのに、なーんだこんなものかと、一見、がっかりさせられるが、内容はやはり重厚である。じっくり時間をかけさえすれば、必要な資料を満足できるまで掘り起こすことができる。もちろん、クーベルタンとオリンピックに関するものならすべて揃っている。

1922年、IOC本部は、ローザンヌ市の厚意で、市中の公民館「Mon Repos 平和の館」の4階の1部屋の寄贈を受けて、そこに移転。後日、さらに4階全部が寄贈され、その一部に、1915年の設立計画案採択以来の念願であった「オリ



写真 ① クーベルタン胸像

（オリンピック博物館にて）

ンピック図書館・博物館」が本格的に開設されることになる。その4階は、爾来、クーベルタンが生活してきた寓居で、当時のコレクションは、すべて、彼みずからが所蔵していたからにはほかならない。

残念なことに、この図書館と博物館は1970年に休館となる。世界各国から寄贈を得て、増えるばかりのコレクションが収容しきれなくなったからであった。

現在の施設はこうした経緯のもとに、1982年6月23日、市街地に再び開館したものだが、いまではこの施設も手狭になって、コレクションの大半が別館の倉庫にしまいこまれている。また、苦肉の策として、市中の諸施設の一角に展示場を借りて、公開している。館内の展示場では、1896年アテネ開催の第1回近代オリンピ

ック以来、歴代の夏期大会並びに冬期大会のディスプレイが定期的に開催され、すべての来館者を楽しませてくれる。また、古今東西の貴重なスポーツ芸術品を多数所蔵し、加えて、古代オリンピック関係資料も豊富にある。一方、蔵書には、バックナンバーの揃った各国あるいは類型別の関係雑誌も多数あり、調査資料として大いに重宝がられている。

オーディオ・ビジュアルサービスも完備していて、専門家にも、一般客にも人気が高い。もちろん、専門的な研究者には、「資料案内サービス」があり、数名の専門家が対応してくれる。展示されていない膨大な資料、貴重図書、古文書は資料案内サービスを利用すれば、丁寧に説明してくれた上で、閲覧できる。当地はフランス語圏なのだが、館員のほとんどが流暢な英語も話し、英語での対応にはこまらない。

オリンピック理念は市井の人びとにとってこそ生活信条にすべきだ、とクーベルタンは折りに触れて説いてきた。その意味で「オリンピック博物館」の役割は大きい。IOCもこの点を認識して、加盟各国が自前のオリンピック博物館を設置する運動を進めている。そのため「オリンピック博物館」は、主要行事の一つとして、「国際シンポジウム：スポーツ博物館経営」をローザンヌで毎年開催している。世界のスポーツ仲間とともに、「みんなのオリンピック理念センターとしての博物館づくり」のノウ・ハウを研鑽するためだ。

IOC自らは、現在、21世紀に対応できる画



写真 ② オリンピック博物館



写真 ③ 建築中の新オリンピック博物館のデッサン
（『オリンピック・レビュー』1989年7月号の表紙より）

期的な構想のもとに、教育・研究施設も完備した「新オリンピック博物館」（写真3）の建設を進めており、その開館日を1993年6月23日に設定している。「新オリンピック博物館」は、あの風光明媚なレマン湖畔のウーシー港地区の、見事に整備されたオリンピック公園内にできあがる。訪れば、眼前の湖面に遊び白鳥も世界の人びとを平和に迎えてくれることになるだろう。

クーベルタンは、きわだって、先見性のある人物だった。しかも「100年先」が読める人物といえは歴史的にも稀であろう。彼は、商業主義に毒されつつある現在のオリンピックを予見していたし、「みんなのスポーツ」が主流になることも予見していた。いや、大衆スポーツの興隆こそが彼の究極的な狙いであつたといってもよい。彼は現実主義者であると同時に、ロマンチストでもあつた。だから、主知主義から派生した、見えすぎる矛盾を浄化するために、スポーツによって人間に生きる力と希望を与えようと闘つたのである。

クーベルタンは「スポーツは純粹、それを悪用する人間に罪がある」とも書き残している。昨今のIOCの活動やオリンピック関係の話題はどうも金権主義に堕してるように思われる。いまこそ、21世紀のために、「オリンピック運動」が果たしてきた歴史的事実を正当に評価し、その理念を再確認すべきであろう。その考察の現場が大学であってもよい。大学の協力こそは、クーベルタンが100年前に希求していたことにほかならない。

博物館実習における「展示実習」雑感

本学博物館学課程は昭和36年開設されて以来本年が30周年となり、これを記念して本誌特集号として記念論文集の編集が進んでいる。そこで本学博物館学課程における「博物館実習」とその展示実習について記してみたい。

開講当時の実習内容をみると次のようである。

- ①全体の講義については「博物館関係諸法令の解説」「収集・保存法」「考古・歴史・民俗資料解説」
- ②見学実習については「施設・展示」「資料鑑賞」「史跡保存方法」
- ③実技では「収集・保管法」「資料整理法」「分類目録法」「自然科学資料整理法」「民俗資料整理法」「古文書整理法」「視聴覚資料の取扱法」「資料展示解説」「修理保存手入法」「写真撮影法」「美術資料取扱」「資料受入」「普及活動」
- ④実務として「考古学資料採集」(野外)「学年実習」(資料解説と展示)
- ⑤巡検・調査として「地域博物館の資料見学」「資料採集」
- ⑥報告として「巡検・調査の報告」「実習結果のグループ報告」「レポート提出」

以上の6項目が年間の実習としてカリキュラムに組まれていた。30年を過ぎた現在でもこの大筋は変わらない。博物館関係諸法令についての知識は学芸員にとって必要であるし、収集・保存等の基礎知識の修得も当然である。見学実習については当初より重要視され、多数の施設の見学がカリキュラムに組込まれていた。授業と併行して、金曜日の午後にも京阪神の博物館施設を見学して廻り、その感想及び学習したことを毎回レポートにして提出させた。実務実習では考古学資料を中心としての整理、保管復元、接合、拓本及びこれらの写真撮影、現像、焼付実習であった。資料採集、巡検、調査等は奈良県明日香地方の遺跡を巡って金石文の拓本をとったり、実測等も行なっている。そして年度末に総括としてレポートの提出があった。

博物館実習展示を本格的にケース等を使用し行ない始めたのは昭和53年度からである。52年

度実施予定で内示を受けたが準備不足で実施できなかった。故小野勝年先生が学生に実際に展示作業を行なわせ、若干でもその雰囲気をつかませることが実習の充実につながる。展示資料を一部移管し、展示ケース3台で模擬展示をやらせたいとの申し出であり、演習室(兼会議室)へ展示ケースを移して準備が始った。最終授業の2週間前【1月12日金】より案内、パンフレット、レジュメ等の作成と資料の借出しなどで忙しく動き廻っている。33名の受講生が5班に分れそれぞれ1ケースを受持ち

- 1班「古代の仏教美術」(美術工芸班)
- 2班「仏像の美」(民俗芸能班)
- 3班「平安貴族の美術」(彫刻班)
- 4班「古墳時代の武器・武具」(考古1班)
- 5班「TooL 祖先より現代へ」(考古2班)

のタイトルにて展示を行ない翌週の1月19日(金)一応の完成を見た(授業最終日)。実習担当者全員が出席され、その講評にあたられた。先ず学生が展示について各班のテーマ選定と展示趣旨を説明し解説を行ない、それに対し諸先生方の講評があった。総体的に良く出来ているが、展示技術において、細部への心くばりが欠けている。例えば解説題箋の置き方や、解説における文字の不統一、資料名、年代、所蔵者の配列の不統一、同一資料であるのに題箋を数種使用し解説を行なっている。あるいは展示位置のアンバランス、資料展示配列のアンバランスなどの指摘があった。またパンフレット、カタログについては「資料」そのものについての知識がとぼしく、歴史的な解説ばかりで終わっている。誤字、脱字等が多い……などであった。

最後の学生の提出したレポートにおいては「実際に資料を展示してみて、限られたスペースの中にバランス良く、また如何にその資料に注目させるかということは難しく、学芸員の仕事の重大さと、奥が深く、多種多様で、さまざまな知識も要求され、慎重さ、緻密さも要求される仕事であり、日々の研鑽が如何に必要であるかを身をもって体感した。と同時に学芸員業務がより一層魅力的なものになった」などの感

想が書かれていた。また他のレポートにおいては「カリキュラムの中で、我々は学芸員の方々が日々行なわれている職務のほんの一部分について、実際に自分達の手で行なった。2時間で1枚の題箋解説もかけなかったし、図録の割り付にはさらに時間を要し……展示会の企画、立案、日程組立、借用交渉、図録執筆など体験により学芸員の御苦勞が理解できた。……仮に学芸員になれなくても、博物館へ足を運ぶ機会を一層増やし、批判的な目で観察すると同時に、

その奥にあるものの様々な努力の結果であることも識るであろう」このようなレポートが書けるのも展示実習の体験を通じてのことであろうと思う。昭和54年度よりは履修許可者を60名(従来は30名)とし、2クラスの授業を行なうことになり、Aクラスを歴史、考古、民俗等に興味ある学生、Bクラスを美学、美術史に興味ある学生として開講されることになった。以下については次号にゆずりたい。 **【角田芳昭】**



実習展風景

平成3年度（1991）調査報告 東北地方の遺跡及び博物館施設

角 田 芳 昭

考古学等資料室所蔵の諸資料について毎年その出土地の確認、写真撮影などの調査を実施し、その結果を本誌及び紀要等へ報告してきた。本年度は東北地方の青森県、岩手県、秋田県、宮城県の遺跡の調査及び博物館施設を見学したので、ここに記しておきたい。

本学所蔵資料としては「青森県亀ヶ岡遺跡」出土の土器、土偶、「岩手県北上市更木町」出土の土器、土偶、土版、石器「岩手県上閉伊郡宮守村」出土の土器、石器、獣骨「秋田県」各地出土の石器類、「宮城県多賀城廃寺」出土瓦等の資料数百点がある。調査日数に限りがあるので、前回（昭和58年）調査していない遺跡を訪れた。調査は平成2年7月3日より7日までである。

7月4日早朝弘前駅に着く。朝食の後早速「弘前城」を見学する。国指定史跡で津軽統一を成し遂げた津軽為信によって慶長8年（1603）に計画、二代信牧が同15年に着手し、翌16年に完成した。以後津軽氏の居城として廃藩に至るまでの260年間、津軽藩政の中心となった。最初は

五層であったが、寛永4年（1627）落雷で焼失したとの記録があり、現在の天主は三層で9代藩主寧親が文化7年（1810）建てられたものである。城内は史料館として津軽藩政時代の歴史資料を展示している。為信公画像、津軽家紋牡丹付駕籠・鴨川常雲作「唐獅子図」屏風が展示されている。城跡には市立博物館、植物園などもありカルチャーゾーンとして市民に愛され、特に桜の弘前城として近郊より観光客が訪れる。

弘前を後に五能線にて五所川原駅へ、駅前より弘南バスにて「亀ヶ岡遺跡」を訪れる。亀ヶ岡遺跡は青森県西津軽郡木造町館岡にあり、既に江戸時代初期に発見された記録が残っている。昭和19年国の史跡に指定され、保護されて来た。本学所蔵資料には「土偶頭部」及び「土器」若干があるが、いずれも学史的に著名である。『尚古図録』（明治4年刊・横山由清編）に「陸奥国亀岡土中所護土偶人頭」（神田孟恪蔵）とあり、この土偶の側面図が描かれている。土偶の側面図が描かれた最初のものとして学史的意義がある。また「香炉型土器」は東京人類学会雑誌4巻42号に「後台欠損セル者ナリ、出所ハ陸奥国津軽ノ瓶ヶ岡ナリ、養虫老人自ラ地ヲ掘リ之ヲ獲テ余ニ贈レリ」と神田孝平が紹介している。

亀ヶ岡遺跡は明治初期より幾度か発掘され、



亀ヶ岡遺跡へ建立された大石像土偶



明治4年発行「尚古図録」より



青森県郷土館展示風景

また調査され、縄文前期末葉から中期・後期と、遺跡の形成主体である晩期、そして弥生時代、平安時代、中世にわたる遺物が出土することが判明した。多くの優品が出土し、国及び青森県等指定文化財に指定されている。遺跡は館岡雷電宮のある丘陵先端部一体と、北と南側の小支谷に及び、低湿地および泥炭層は沢根・近江沢と呼ぶ沢地にある。「亀ヶ岡石器時代遺蹟名勝天然記念物指定地 昭和19年6月26日指定」とあり、平成2年8月建立された遮光器土偶の大模型があり、遺跡の標識としてはユニークである。その後木造町字館岡にある縄文館を見学する、館長渡辺屋城氏のご案内で展示室を見学、周辺町民が収集し寄贈された縄文土器及び石器、土偶等が多数展示されており、香炉型土器も本学のものとそっくりの資料も展示されていた。また片隅にミュージアムショップもあり、陶器類、土偶の複製が販売されていた。続いて木造町字若緑にある縄文住居展示資料館カルコを見学、いにしえ人の確かな鼓動、縄文文化の息吹を感じる「復元家屋」遮光器土偶の立体映像（ホログラフィー）、学史年表等わかり易く展示されていた。次に近くの森田村歴史民俗資料館を見学した。円筒式土器所蔵館として著名で、実見し、

多量の資料に圧倒された、このうち219点が重要文化財として平成2年6月に指定されたと聞く。この貴重な資料を有効に活用し、充実した展示と教育研究に寄与していただけたらと願う。また、民俗資料の収集にも同様に充実発展が期待される。津軽の大自然の中へ溶け込んでいる歴史・文化の町木造町は今後も着実に発展していくことであろう。五所川原市よりバスにて1時間20分、青森市へ着き1泊する。

7月5日9時30分、開館と同時に青森県立郷土館を見学する。鉄筋コンクリート3階建て第1展示室は先史文化、第2展示室は青森の自然、第3展示室は郷土の歩み、第4展示室は庶民の暮らし、第5展示室は発展する青森県、第6展示室は風韻堂コレクションの展示である。特に風韻堂コレクションは青森市の大高興氏から寄贈された1万点あまりの考古資料で、優品を常時展示しており、特に亀ヶ岡遺跡から出土したものは県指定文化財に指定されたものが多く、本学資料との対比において非常に参考となるものばかりであった。特に研究会・講演会の開催や調査・研究活動は他館の追従を許さない秀れた業績を残されている。

青森駅発10時20分、十和田行J Rバス乗車、青葉、若葉の燃えるような中を進む。バスの放送にてこの地方の地理・歴史・自然を語ってくれる。八甲田山はもやの中、城ヶ倉温泉、酸ヶ湯温泉を過ぎる頃には青森トド松、ブナ林のまっただ中、猿倉温泉を通過するころは周辺に水バショウの花、シャクナゲなど生え、目を楽しませてくれる。約3時間のバスの旅は終り十和田湖へ着く、空の青と水の藍とが重なり合う神秘的な十和田湖は美しい。更にバスに乗り湖の周



特別史跡 秋田県鹿角市所在「大湯環状列石」



湖南先生姪御さんから写真の説明を受けられる網干教授

辺を巡り約50分で大湯温泉駅へ着き、特別史跡「大湯環状列石」（ストーンサークル）を見学する。この遺跡は秋田県鹿角市に所在し、県道をはさんで東側のものが野中堂遺跡、西側が万座遺跡と呼ばれている。出土土器から縄文時代後期前葉と推定され、自然の河原石で作られた組石群である。昭和6年耕地整備工事によって発見され、昭和22年後藤守一先生等により調査が行なわれ、学界の注目するところとなり、26年文部省文化財保護委員会による大規模な発掘調査が行なわれ、土器・石器類の出土があり、31年特別史跡に指定された。祭祀場説、墓地説、その他の説がある。我々が見学している時に、かねてより連絡しておいた鹿角市先人顕彰館長斉藤長八氏、前館長佐藤一彦氏（現鹿角市民生部国保事業課長）がお見えになり、説明を受け



鹿角市先人顕彰館

る。両氏のご案内にて周辺遺跡を見学し、迎えるの車に同乗させていただき、東洋史学の泰斗内藤湖南生誕地毛馬内にある御宅「蒼龍窟」を見学させていただいた。通称「館」あるいは「柏崎館」と呼ばれているところにあり、眺望のよい丘陵地帯で、明治維新まで毛馬内代官所と館主桜庭家の館があった土地である。南に奥羽連峰、西に毛馬富士から月山が眺望できる景観の地である。庭内を一巡し、邸内に入り湖南先生の姪御に当られる琴さんにお逢いし、遺墨や写真の説明を受けた。「風光園」「思無邪」と書かれた湖南独特の風格ある書が額装され、かかげられていた。別れ際にお元気でと手をさしのべるとにっこりとにぎり返された手は緩つかく、何となく故郷の老母を思い出した。その後すぐ近くの「先人顕彰館」についた。周囲が武家屋敷のためこの景観にマッチするよう鉄筋コンクリート高床式平屋建で、しっかりと落ちついた建物である。門を入り階段を昇ると正面ホールの左に事務室、右へ会議室を兼ねた多面的ホールがあり、事務室の向いが展示室の入口である。展示室の左側が収蔵庫と機械室であり、床面積540平方メートルと聞く。

展示室入口正面のところへ内藤湖南旧宅「蒼龍窟」の書院が復元してあり、落ちついた雰囲気をかもし出している。照明・展示ケースなど落ちついた色調で、湖南の遺品、書簡、遺墨、恭仁山荘ミニチュアなど、約100点余が展示しており、特に地元でしか見られない書の掛軸など貴重な資料に接することができたことに感激した。その奥に「和井内貞行」の邸宅ミニチュア、胸像、偉業を掲載した教科書、単行本等が展示しており、さらに各界の先覚者に関する資料が



岩手県立博物館



北上市立博物館

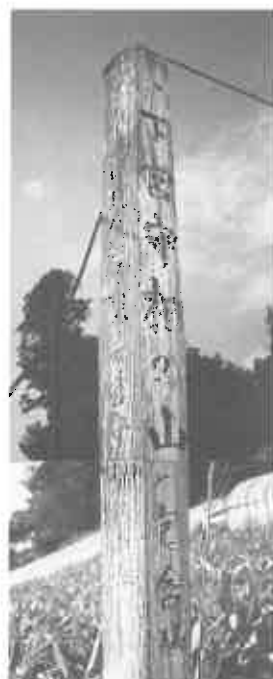
展示解説されている。内藤湖南資料に関しては鋭意収集が続けられており、充実している。関西大学も創立100周年記念事業の一環として湖南の蔵書の全てと晩年の邸宅「恭仁山荘」を譲り受けて管理と湖南文庫を設けて整理を行なっている関係上、この鹿角市先人顕彰館とは約10年前より交流しており、お互いに研鑽し向上に励んでいる。機関誌『湖南』の発行（第11号）もされている。今後の発展が最も期待される社会教育施設である。夕刻まで見学を許され、19時39分盛岡駅に着き宿舎へ入った。

7月6日9時ホテルを出発して「岩手県立博物館」を見学する。昭和55（1980）年10月県制100年を記念して開館した総合博物館であり、落ちついた外観である。延床面積12,052m²で、屋外に民家も移築されている。また散策広場として県内に自生している山野草・樹木を植栽し、岩石なども配置されている。立体展示も素晴らしく、コンパニオンが展示資料解説してくれるのも良い。午後より北上市立博物館を見学する。北上市埋蔵文化財センター技師稲野裕介氏のご案内にて、先ず北上市埋蔵文化財センターを訪問する。縄文遺跡の発掘調査で発見された土器、石器、土偶などを職員が研究整理されていた。本学所蔵資料の中に北上市臥牛遺跡出土の土器類が多数あり、地元で発掘された資料との対比、遺跡の歴史などを聞き非常に参考となった。続いて博物館を見学した。昭和48年4月に開館され、「北上川とその流域に生きた人々」をテーマに、旧石器時代から現代の資料を展示し、考古、極楽寺、藩境、舟運関係の展示が中心となっている。またこの博物館に附設して「みちのく民俗村」があり、北上川流域を中心とした岩手県の古民家や歴史的建造物など代表的文化遺産を展示保存している。旧菅野家、今野家住宅、北

川家他炭焼小屋などその数およそ18棟、興味深く見学した。民俗資料館として昭和53年県立黒沢尻南高等学校旧校舎を移築し、その中で民具、酒づくり、職人の道具などを展示解説されている。その上消防資料館もあり市内各地から集められた注水具、消火補助具、警報具、消防ポンプ車、また大火災の様子の写真も展示されている。市立博物館としては実に充実しており、1日ゆっくり見学してみたい施設である。

続いて少々時間があつたので『遠野物語』で著名な遠野市へ足を運んだ。柳田國男の『遠野物語』が世に発表されて以来81年日本全国民話に興味ある人々が訪れたであろう遠野市、実にのどかな東北のまちのようであった。しかし地元で生活していくには厳しい自然と共に生きていかねばならず諸々の苦労が生まれるであろう。遠野地方の農家のかつての生活形態の再現を図っている資料や、『遠野物語』の話者、佐々木喜善の資料と同氏をとりまく人々の交流の資料、そして柳田國男の『遠野物語』初版本、原稿などが展示されている「伝承園」も見学した。屋外では植物園、曲がり家、工芸館、染工場など教育的配慮のもとに建っている。また民芸品の製作、実演など体験学習が出来るよう運営されている。春夏秋冬の遠野を体験してみたいものだ。

続いて本学所蔵資料の出土した上閉伊郡宮守村の遺跡調査に向う。本学に多数の石鏡、石斧、石棒等の石器があり、宮守村出土と記録されているので確認を行なった。大体の見当をつけて現地へいき古老に聞く、「相ノ山」というところへ宮守村教育委員会の遺跡を示す標柱が建てられていた。周囲を（16ページに続く）



岩手県上閉伊郡宮守村
相ノ山包含地

歩き廻り表面採集で土器片若干と石鏃1点を見付けた。本学資料(本山考古室要録 No656) 無茎石鏃とほぼ同様のもので石質はチャートであった。他に2ヶ所文化財地図の地名を調査したが、該当する遺跡が見当らず、後日調査を行なうことにした。終日ご案内や調査指導下さった稲野裕介氏に御礼申し上げる。北上駅へ帰り夕刻7時20分仙台市内のホテルに着く。

資料貸出

- | | |
|-----------------|-----|
| 1 眉底付冑・挂甲装具復元品 | 1 具 |
| 2 横剗板鋌留短甲復元品 | 1 具 |
| 3 小札威復元品 | 3 綴 |
| 4 羊皮(内蒙採集)直弧文様入 | 1 基 |

以上4件「大阪狭山市立郷土資料館特別展」へ出陳

期間 平成3年10月11日～11月末日

最終日の7月7日(日)は宮城県下の調査で早朝日本三景の一つ松島湾を見学し、伊達政宗公霊廟「瑞鳳殿」へお参りし、多賀城趾、東北歴史資料館、仙台市博物館、陵奥国分寺趾を見学した。宮城県下の調査については誌面の都合で次号に発表したい。ご案内、ご説明下さいました関係各位の皆様に謝意を表する。

- | | |
|-------|-------|
| 1 鈴 釧 | } 各1点 |
| 2 三環鈴 | |
| 3 鈴杏葉 | |
| 4 五鈴鏡 | |
| 5 礎 | |

埼玉県立博物館特別展「日本の音」展へ出陳

期間 平成3年4月13日～6月18日

編集後記

『阡陵』24号をお届けいたします。今回もお忙しいところ網干善教委員長、伴義孝教授、松浦章教授にご依頼し原稿をいただきました。感謝申し上げます。月日のたつのは早いもので、末永雅雄先生がご逝去になり半年が過ぎました。『博物館学課程開講30周年記念論文集』(平成4年3月刊行予定)を読むのを楽しみにしていると申されておられ、刊行されたら真先に持参しご指導を迎えつもりでありました。残念でなりません。昭和36年末永先生はじめ諸先生方のご尽力で「博物館学課程」が開設せられ、以来多数の学芸員資格取得者が巣立ち関連施設で活躍しています。20周年の折、本彙報『阡陵』の特集号としてA5判768ページ(執筆32名)の記念論文集が発行され学界へ多少なりとも寄与いたしました。末永先生はその序文で「関西大学に就任して博物館学設置に加わり、博物館の講義を分担することになり学生諸君を連れて各地の博物

館を見学して廻った、1泊か2泊のことであるが学生と寝食を共にすることの楽しさもあった。それがいま20年の歴史を重ね、大学から送られて来た、各種の論文を見て、指導した時代から考えると諸君の成長を喜ばしく感じ、この中から将来わが国の博物館学を一層向上させる有為の材もあらうと思うと、この序文を書く心がはずむ。その成果は更につぎの20年後に現れるかも知れない。私はそれを期待する」と書かれている。以来10年30周年記念論文集においては先生のお言葉のとおりそれを上廻る執筆者を得て発刊の準備が進められています。資料室での博物館実習もますます充実した講義となっており、博物館学課程のさらなる発展が期待されます。本誌も今後一層充実させるべく編集していきたいと存じますので皆様のご指導をお願いいたします。

表紙の写真は「縄文土器」で「本山考古室目録」No457-5の資料である 【角田芳昭】

関西大学考古学等資料室彙報 No.24 平成3年11月30日 発行
 関西大学考古学等資料室 編集
 ナニワ印刷(株) 印刷